

奉賛会講演集 第六輯

伊勢の御遷宮

—その秘められた意味—

中西正幸

三重県護国神社奉賛会

三重県護国神社奉賛会主催
第六回公開講演会

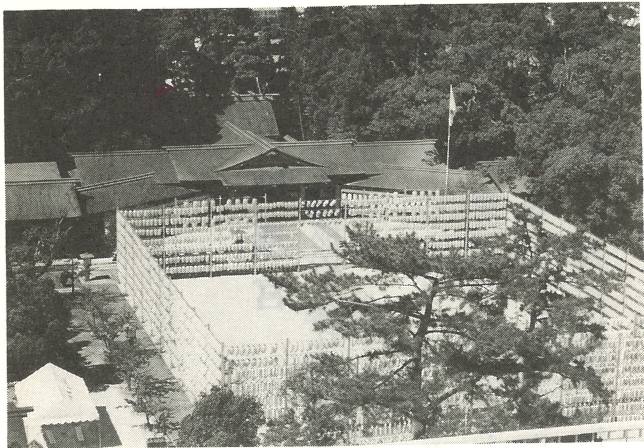
伊勢の御遷宮

—その秘められた意味—

國學院大學 教授

中西正幸

平成四年十月二十四日
於 三重県護国神社参集殿



三重県護国神社

明治二年津藩主藤堂高猷公が、津八幡宮境内に小祠を建て、戌辰の役で戦死した藩士の霊を祀る『表忠社』が御創祀であり、以来国事国難に殉ぜられた三重県出身御英霊六万余柱の慰霊および安鎮と感謝の誠を捧げている。

明治七年官祭に列せられ、『官祭招魂社』となる。

同四十二年、現在地に移築遷座する。

昭和十四年、『三重県護国神社』と改称。

昭和天皇・皇太后両陛下には、同五十年十月二十七日行幸啓遊ばされ、御親拝を賜った。

平成元年に、御創祀百二十年・御遷座八十年・御社名改称五十年を迎えた。

毎年春季（四月二十一・二十二日）

秋季（十月二十一・二十二日）の例祭には、県内御遺族を始め奉賛会員・崇敬者等多数が参列している。

第六回公開講座
三重県護国神社奉賛会主催

神社の歴史

三重県護国神社

三重県護国神社奉賛会
発行
昭和五十四年十月二十四日

目次

講師略歴……………1頁

伊勢の御遷宮

—その秘められた意味—

國學院大學
教授 中西正幸

はじめに……………2頁

遷宮と若人……………4頁

遷宮祭……………10頁

大神嘗……………14頁

神殿の造営……………18頁

技法の継承……………24頁

伝統回復……………27頁

清らかな神……………32頁

天地の浄化……………37頁

天皇主体の厳儀……………42頁



中西正幸先生 略歴

國學院大學教授 神道祭祀学専攻
神社本庁教学委員

生年月日 昭和19年生
出身地 三重県多気郡多気町
最終学歴 國學院大學大学院
文学研究科神道学専攻博士課程終了
略歴 昭和43年 國學院大學文学部卒業
三重県護国神社奉職
同 44年 國學院大學大学院入学
同 49年 伊勢神宮奉職
同 59年 伊勢神宮権祢宜拝命
総務部弘報課長
平成4年 伊勢神宮退職
國學院大學教授となる

主な著書

「永世への祈り—近現代の式年遷宮—」
「伊勢の遷宮」

伊勢の御遷宮

—その秘められた意味—

國學院大學 教授 中西正幸

はじめに

私が神職として神社界にはじめて第一歩を踏み出したのが、この三重県護国神社で、旧職員の私にとりましては本当に生涯忘れることのできないお宮です。

もう一点、神職になるには、インターンではございませんが、神社で実習をしなければ

ばなりません。大学入学の春四月、桜花爛漫と散り咲く九段の坂を登りましてから一年間、靖国神社で実習をさせていただきました。そのように靖国の英霊あるいは護国の英霊に、格別の御神縁をいただいて今日まできたのだと、さきほどの正式参拝の折りにも、胸の熱くなる思いをいたしておりました。左様な事をつらつら顧みますと、私は、護国神社の境内でお話をさせていただく機会に恵まれましたこと、本当に心からなる喜びに堪えないところです。

他県ですと、伊勢の式年遷宮と言つても、ほとんど予備知識もない処でお話申し上げる感がありますが、なにしろ大神宮様のお膝元、地元三重の皆様ですので、敢えて基礎的な事とめなおす必要もないと思います。

本日は『伊勢の御遷宮』と題しまして、式年遷宮とはいったい何のために行われるのか、その秘められた意味を申し上げたいと思っております。しかもそれは、遷宮齋行の

理由そのものを問うことに他ならず、平素、考えております四点を、ひとつひとつ挙げさせていただきます。第一点は祭典から見た遷宮、祭りとして遷宮がもつ側面はどういうことか。第二点が、御造宮という建物を造る側面から見てどういうことか。第三点は、私たち国民全体にとって遷宮をどう考えるべきか。第四点は、国家的な側面で天皇の御位の源泉を尋ねてみたい。以上について、順を追って共に考えてゆきたいと思ひます。

遷宮と若人

式年遷宮とは、一体いかなる規模や構成を持つものでしょうか。まず遷宮とは、準備に前後九ヶ年という永い歳月を要するのです。今から振り返りますと、去る昭和五十九年二月に先帝陛下より元二條大宮司が御準備開始の聖旨を拝し、六十年の年頭、神宮で

は式年造営庁が設置される運びとなりました。初詣の人波がひきもきらない最中、遷宮御準備が本格的に着手され、当時は本当にこれからいよいよ遷宮だということで、「御造営元年」と申しました。新緑のなか、五月に山口・木本祭このもとさいが執り行われ、次いで六十一・二年には、お木曳きです。木曾の御み杣山こまやまで用材を伐採して伊勢に運ぶため、長野・岐阜の両県民や地元伊勢の神領民の方々、あるいは全国有志の方々など、実に三十万におよぶ奉曳団に御奉仕をいただきました。今から思えば本当に遠い話になります。また平成元年の澄みきつた秋空のもと、遷宮四年前に行われた宇治橋の架け替えと渡り始め。三代夫婦を先頭にして、前後十万という人々が本当に賑々しく渡り納められた事を考えますと、あつという間の八年でした。

遷宮前年にあたる本年三月に槌音たかく御棟木を奉揚する上棟祭が、七月には御屋根を葺き終えるいふぶ麓祭ふもとまつが、それぞれ滞りなく挙行されました。今はあの簀屋根すやねという困いの

なかに御本殿はおおよそ、その姿形をお示しになられています。細工物とかか鋳金物かんのものなど色々な事が残されておりますが、現在、お建物はゆかしい佇いをほぼ示しておられるという状況です。

やがて一年後、来年の十月、厳かに御遷宮が齋行されます。その御遷宮直前、来年の真夏の盛り、八月にお白石持ち行事が行われます。これもまた、地元伊勢は申すに及ばず、全国から数万という奉仕参加をいただき、お白石が新装なった輝くばかりの御殿まわりに敷きつめられるのです。そして、前例によりますと十月二日に内宮、同じく五日に外宮におきまして、遷御の儀が厳肅に執り行われる予定に相成っております。予定と申し上げましたのは、陛下に日時をお定めいただくのが慣例であり、明治以降、十月二日に内宮、十月五日に外宮という式月式日が定着して今日に至っているためです。

式年遷宮とは奈良朝以前、はるか遠い時代の天武天皇が御発願になり、そのお后ごごであ

つた持統天皇が第一回を遂行されてより、今日まで千三百年を数えています。そういう歴史と伝統あふれる神宮最大のお祭りが、あと一年を残し、第六十一回目として明年に迫っているのです。

遷宮の規模につきまして、まず木曾の国有林から十年の歳月をかけて、およそ二百年から四百年の樹齢を持つ木曾檜を、一万四千本ほど伐採します。また、御殿にお納めする御神宝類は千数百点にのぼり、本当に当代一流の名工が伝統的な技法の粋を凝らして調製に当たっておられます。あるいは宮大工が、延べ十二万人を要して造宮にあたります。さらにその必要な経費は三百億円を超える巨額を以て、これが鋭意推進されるのであります。

神宮の杜^も深くに奉仕しておりますと、ミス伊勢志摩やミス三重などコンテストの審査に出るのは、ひとときわ華やいだまぶしさを感じる機会でした。その会場には、十代後半

から二十代初めのミスコンの応募者達が並んでいます。三重県を代表する美人たちですから、三重をいろいろ外部にアピールしてもらわなければなりません。「三重県を象徴するものは何ですか」という質問がよく出ます。金比羅詣での森の石松よろしく、私は神宮が何番目に出るのかと、指折り数えて聞いておりました。

若い女性の答えでは、まず第一に三重という鈴鹿サーキット、F1が出され、当節の人気から止むをえないと聞いておりました。二番目ぐらいかなと聞いてみると、次はミキモト・パールときますが、女性だから当然かと思いましたが、そして三番目に、やつと伊勢神宮か松尾芭蕉が出るのです。本日、お出ましの皆様は御年配の方々ですから、この様な事はございませんでしょう。しかし伊勢神宮が十代後半から二十代前半の方々では、三本か四本の指を折らないと出てこない状況は、極めて深刻な事であると私は思っています。まして、その伊勢で二十年毎に行われる式年遷宮について、知識を持っている

若い方々は皆無だろう、という絶望にかられたのです。

私はつねに神宮司庁におり、月に数回位しか社頭奉仕はいたしませんでした。ある時、ササツと若い女性が寄ってきて言うことに、びつくりして度胆を抜かれました。「このお寺は誰が居るのですか。」と訊くのです。このお寺と言われて、私はがつくりしました。お宮とお寺の区別がつかないというのは、神仏一体なら結構ですが、日本人としての基礎的な知識に欠けている。さらに、「祀られておられますか」とは訊きませんでした。二重に三重にガックリきたのです。

式年遷宮の事を、県民はもとより国民全般に及ぶまで、皆様のお一人お一人がその意味をしっかりとお伝えいただきたい。そうでなければ、式年遷宮を理解する若者はいなくなるのではないかと考えます。特にその事に祈りをこめ式年遷宮の意味というものを、四点にわたり申し上げたいと思います。

遷宮祭

殊に世間でよく出る疑問は、三百億円という巨額を使って、僅か二十年しか持たないお宮なり宝物なりを造るのは、非常な無駄遣いではないかという意見です。それに対して、次のように二つの答えを申し上げます。

第一点は、祭りからみて遷宮はどういうものかの意味合いです。祭りから見ると昭和六十年の山口祭から、平成五年の遷宮後、神さまのお喜びである御神楽^{みかぐら}まで、全部数えと二十二を越えます。だから式年遷宮とは、お宮の建て替え以前の問題として、二十余のお祭りが全部集まっつて、より大きな「遷宮祭」という祭りを構成していることを、まず押さえたいと思います。それが、祭典からみた遷宮なのです。

私は國學院大學では、祭祀学が専攻ですので、祭りをこれから専門にやっていかなければなりません。祭りとは何か。衣食住の生活文化をめぐって、その核心のすがたを、子々孫々に知らしめ伝えゆくのが、祭りの大きな働きであろうと考えます。

家に帰りますと、折ふし家内が私にささやく事があります。「今日何の日か知ってる」と。おおよそ分かった試しはないのですが、色々考えますとこの護国神社で、私達が結婚式を挙げさせていただいた記念すべき佳日でした。食卓にささやかなご馳走を盛り、心して待っていていました。家内にとっては小さな祝い事ですが、何故そういう事をするのか。私ども夫婦の間で、一生涯忘れてはならない日を、小さな祝祭を営んでお互いが喜び確認し合う、そういう事だろうと思っております。

ならば、私ども夫婦だけではなくて日本の国民全体にとって、民族が大和島根に生活を始めてからこの方、絶対忘れてはならない記憶の核心にあるものとは何か。それは神

々と自然と人間がより添い力を合わせて、〈生きる〉という生活を支える衣・食・住そのものこそ、何よりも大切なものです。そして恐らく、祭りという営みを通して私どもは、絶えず基本のありかたを確認しつつけて、今日に至っているのではないのでしょうか。そこで神社の祭りを振り返ってみますと、護国神社とか伊勢神宮とか色々特殊な性格があります。氏神さまを中心として神社の祭りを考えてみますと、食べる、着る、寝るという最も基本的な姿を、いわばラップに包み込むようにして祭りを営んでいるのではないのでしょうか。

食べる事においては、もちろん神さまに奉る米・塩・水を中心とする人間に欠かす事のできない食文化を、何とか祭りの形において伝えようとしています。着ることとしては松阪市に近い機殿神社はたどのにおいて、きわめて伝統的な神御衣祭かんみそさいに先だち、古来、絹と麻の織物を前後二週間かけて織りたてます。そして神さまに夏の衣、冬の衣として奉る。そこ

に衣に関する文化伝統があると思います。

次に住まいですが神宮の御殿を、神居殿しんきよと神用殿しんようという二つの御殿に分けて考えることができます。神居殿というのは、原則として神さまが居られる御殿で、萱草で屋根が葺かれております。それに対して神さまの御用に使う御殿を、神用殿と分けましょう。これは大抵板葺きです。およそ建物の屋根というものは、草で葺いてある萱葺きから、板葺き、板葺きから桧皮葺きあるいはこけら葺き、そして銅板葺きと発展してきます。とすれば、少なくとも萱葺きや板葺きという建物は、極めて古い建物の姿をとどめるものであり、神社の佇まいそのものが、我々の住まいに関する最も古い姿を偲ばせているということでしょう。

神社そのものは、国民生活がいろいろと変化してゆく中で、日本民族として絶対に忘れてはならない文化の核心を、祭の形で伝えていく。歴史はつねに変化を迫ってやまず、

あるいは物事を風化させます。そういう歴史的な変化に抗して、むしろ祭りは人々が記憶し続けなければならない文化の核心を、神々や祖先の心として崩さずもち伝える営みであろうと考えます。絶対に忘れてはならない民族文化の核心が、この遷宮という大きな祭りの中に横たわっている事を、まず前提として押さえなければならぬと思います。

大神嘗

伊勢神宮で大きな祭りといえば、年中最大の収穫祭である十月十七日の神嘗祭かみなめをおいて他にありません。伊勢では神嘗祭といういい方はせず市民周知の意味合いをこめて、単に「大祭おほまつり」と呼んでいます。四季の彩りをそえてくりひろげられる年間千六百回の祭りのなかでも、この神嘗祭が一番大きな祭りです。しかも式年遷宮は二十年に一度のサ

イクルをもって、より大規模にとり行われる祭りですから、「大神嘗祭」と言うのです。したがって遷宮とは、二十年毎に巡りくる、より大きな収穫祭だというのが、第一の意味だと思えます。

神社のお祭りは、秋の稔りを神前に報告・感謝する秋の収穫祭をめざして、一年間の祭暦まつりごよみが組まれているとよく言われます。春の祈年としごいのお祭りから、伊勢神宮ならば収穫祭である神嘗祭、一般の神社ですと十一月二十三日の新嘗祭までです。今日では勤労感謝の日と、訳の分からない名前ですが、戦後決められた一番はじめの祝日法案を見ますと、収穫感謝の日となっていました。だから、十一月二十三日は勤労に感謝するのではなくて、収穫に感謝する日なのです。これの方が本来の意味に近いようですね。

新嘗祭はそういう意味で、全国民にとって秋の稔りをいただく日、心から神さまに収穫の喜びを感謝すべき祭りということになります。では神嘗祭もまた、それだけの意味

か。あるいは収穫ということを、もう少し極めていけば、どのような意味のひろがりを見せるかという事です。私たちは一年の歩みを、三百六十五日と理解しています。けれども、これは暦数上の計算なり、約束事にすぎないのです。確かに十二月の大晦日から一月の元日になりますと、たった一日が過ぎたに拘かからず、物みな全てが新しく、空気すらも清々しく感じます。あの社会が一変してしまう心理ドラマをみるに近いような、お正月の祝い事というのは分かりますが、それでもやはりカレンダー方式の考えかたです。一年の「年」というのは、本来は年穀ねんこくといい「米」を意味していました。ならば一年とは、本来的な言い方をすれば、古いお米から新しいお米を口にする。それが「稲」を時間の単位とする、一年の切り替わりの本来の意味でしょう。そして伊勢の神嘗祭は神宮にとって、自然のリズムに即した正月だという感じで、私はご奉仕申し上げてきました。従って、大祭に奉仕する時には、神職は去年着たお祭りの装束を全部新しく取り替

え、お祭りに使う道具を全部新しくします。あるいは神さまの御殿の中には、カーテン状の御帳のまどとか色々なものがありますが、それもすべて取り替えます。何故か。初めて新米を口にする、正月を迎えたからです。米作り民族にとって、正月とは十二月三十一日の次に来る一月一日ではなくて、新米を口にする日そのもの、時間を更新する「正月」の文化的な意義を示していると思つています。

更にもうひとつの意味からすれば、悠久二千年のかなた、五十鈴川のほとりの現在地に内宮がお鎮まりになったのは九月十七日、新暦では十月の十七日となっております。したがって、それは収穫祭当日であり、正月であり、しかも神宮にとっては、言わば誕生日に当たる日なのです。

そういう三つの意味合いを込めて、年中最大のお祭りが行われるのだという事を、私たちが充分に理解しておかないと、神嘗祭のもつ意味が分からなくなるし、全国神社の

大祭日にしても同じことだと思えます。いずれにしても、祭りの観点から遷宮に関連させてみるなら、遷宮とは、毎年行われる収穫祭であり、正月であり、そして神宮が初めてあそこにお鎮まりになった鎮座当日である事を、二十年毎の繰り返しの中で、より大きく国民全体が再確認するのが、第一の意味だと私は理解しております。

神殿の造営

次に、遷宮とはお宮を建て替える事。そのような目に見える物的条件において、よく皆様方がお考えであろうと思えます。それは造営から見た遷宮という、第二の内容に関わるものです。こうした物質的な角度から遷宮に迫る場合、どれほど長持ちするかの耐用性が第一点。もうひとつは技術継承はどうかというのが第二点、この二つのことが理

由として挙げられます。

まず第一番目の耐用性です。それと関連して遷宮と一言でいいますが、これには三つのやり方があります。「正遷宮」、正規の遷宮とは、二十年に一度のサイクルで巡ってくるものです。表のように、両宮ともに持統天皇より六十回の多きを数えて、今日まできていますから、次が六十一回目という事で明年十月に行われることはご承知の通りです。これは法式どおりのルールに則った遷宮です。

種別	皇大神宮	豊受大神宮
正遷宮	六〇	六〇
仮殿遷宮	六〇	七〇
臨時遷宮	五	〇

ところが歴史の風雪というものは激しい流れをしますから、まっとうな考えでは完全にカバーしきれない。非常事態が起こった場合が、次の二つの遷宮です。「仮殿遷宮」

「臨時遷宮」と書いてありますが、仮殿遷宮とは、御殿を応急修理をしなくてはならない事態が生じた時です。臨時遷宮というのは、この地上から御殿が無くなってしまった時、たとえば火事で焼失した時などがそれです。現在まで六十回の数を重ね、伊勢神宮は厳かで慕わしいご社頭のたたずまいですが、歴史的に見ますと仮殿・臨時も折り込めば百三十回前後の遷宮を重ねて、今日まできたのだと思わなければなりません。

歴史というものは、それほど四角四面の杓子定規ではいきません。突発事態が度々生じてきた事を含めれば、形態の異なる遷宮を百三十回も重ねております。今日伊勢にお参りしますと、皇祖天照大神のお鎮まりになるお宮の神々しさに心うたれますが、それが正規の遷宮では尊厳性を護持しきれなかった苛烈な歴史の様相を、私たちはぜひとも

頭に入れておかなければならない。そういう意味で、臨時突発の事態を考えなくとも良し今日は、きわめて幸せな時代だと申し上げておきます。

耐用年限はまさにその事にも関連します。掘立柱に萱屋根という建築様式が、唯一神ゆゑいつじん明造りの特徴で、この萱葺きにして掘立ての柱という特徴そのものが、伊勢のお宮では長持ちしない理由になっています。

ここ護国神社の御社頭に参拝しますと、お屋根は本当に緑青をおびた銅板で葺かれ、御殿が基壇の上に建てられ土台石をもって地面から水気が上へ上がってこない様になっております。伊勢にはそれが全く無い。そういう意味では太古さながらのたたずまいであり、しかもそれは高床式の穀物倉に類似しており、床下は神職が自由に通り抜けられるほどの高さです。床が極めて高い高床式ですが、柱は土の中にそのまま埋め、お屋根は草で葺いてありますから、長持ちしないのが特徴です。その意味で二十年に一度の式

年遷宮は、建物の腐朽上から避け難い宿命におかれているのです。

先程、三百億円あまり使って二十年しかもたないのか、という非難があると言いました。それは昨今の非難ではございませんで、明治天皇の御代に、既にそのような意見があった事を、ひとつ紹介いたします。

頃は日露戦争直後、明治二十八〜九年辺りにおこった議論ですが、明治の時代は四十二年が最後の遷宮ですから、遷宮の三〜四年前にあたります。では、どういう議論だったのでしょうか。ヨーロッパから入ってきたコンクリートとかレンガとかの建築資材を、伊勢に合わせ用いたらもつと長持ちするのではないか。文明開化の世の中ですから、当然そういう意見が出ました。

ところがそれに対して明治天皇は「祖宗建国の姿」をしのぶため、建築の古法を敢えて改変すべきでないとお答えになりました。我々の遠い祖先が、この大和橿原の地には

じめて都をお定めになり、第一代神武天皇が国造りをされました。それから御歴代を経て、百二十五代の今上陛下に至る永きにわたって、天皇国日本として今日までできております。日本国民は、この日本という国が初めて出来たその建国の姿と心を伝えゆくため、現実の世界の中で、我が目で確認できる場所がどうしても要ります。それが伊勢のお宮の、あの太古さながらのたたずまいです。伊勢の神宮にお参りすれば、国民は自らこの大和島根に国原が拓ひらかれたいにしへを偲ぶことができます。そうした精神的な意味付けからすれば、二十年毎に伊勢のお宮を造替することを、物質的に勿体無いという感覚で決して把えるべきではない。もつと精神的な極めて高いレベルでとらえるべきではないのか。そういう意味にもとづく明治天皇のお諭しでした。

この聖旨はきわめて奥深く、この精神的な意味を忘れて物中心に遷宮を論じるならば、論議として非常に、レベルが低いと感じております。我々が民族の生命と日本国民であ

る喜びを、ともに伊勢の遷宮で取り戻せるならば、あの建物の草葺きで、掘立柱である太古さながらにお姿に、建国のいにしえを偲ぶべきだという御言葉は、非常に有り難いものとして受け止めております。明治天皇の大御心のふかさのほどが、建国の姿を偲べという事情を的確に物語っていると、確認をしておかなければなりません。

技法の継承

次に技術の問題です。よく宮大工は、三回の遷宮を経験して一人前になるといわれます。一回目は走り使い、二十年後の二回目は、御遷宮の主たる大工としての技術を磨き、三回目の六十年ぶりに来た時には、総棟梁として現場の指揮をとる過程を指します。山作り、庭作りと相對する二つの言葉が有りますが、山作りというのは、木曾の御山で材

木を伐採して伊勢まで運んでくる過程、庭作りとは運ばれて来た材木を刻んでお宮に組み立てていく工程を称します。山作りはともかく、この庭造り全般を指導出来るのは、総棟梁として六十年のキャリアがいると言われるのは、さながらその通りです。

先程、千五百点程の宝物が有ると申しました。実は、これの方が大変な事だと私は思っています。何故大変か。芸術の秋には、正倉院展というものがあります。正倉院御物を一般公開したり、保存の為に風にさらしたりしています。正倉院に納められている品々は約一万点を数えますが、聖武天皇ゆかりの御物としては、百点程です。正倉院御物は古い物だと思われませんが、その中には、明治時代に指定された御物もあります。しかし御物中の御物、百点ほどを限度として考えるなら、それはシルクロードの香り豊かな宝物を保存する事に意義があるのです。今から千三百年前に作られた現物を、タイムカプセルに入れるような形で、今日まで持ち越してきた事にこそ、私は正倉院御物の本当

の真価があると思っています。

ところが伊勢の千五百点という宝物は、こうした正倉院の保存方式に対して再生こそ、まさに使命の中心がおかれております。二十年毎に様式・技法・資材を守りつつ、忠実に造り直すのです。その製作基準は、延喜・天曆の御世、十世紀にあります。伊勢の宝物は、二十年毎に当代一流の人間国宝といわれる名工たちが、それぞれの領域において伝統技術のまにまに再生することに、本当の意味が有るのです。別に安易な比較をしようとは思いませんが、保存する正倉院と再生する伊勢ではどちらが難しいかといえば、再生だということは、皆様も分かっていただけだと思います。

しかも技術者も材料も純国産を建前としますから、中国産の漆うるしを使うことができません。染料にいたっては紅花の栽培から草木染めまでの全工程をたどります。二十年毎に再生してゆく事は、古代の宝物を作った技術や資材を、永遠に可能な限り持ち越してゆ

く事です。結果だけの問題ではなく、作る問題になれば、伊勢神宮の宝物は新しさに意味がある。つまり、伝統的な仕様をあくまでも尊重しつつ、つねに新たな再生を遂げゆく神宝調進の思想は、決して矛盾・対立するものではなく、永遠と不易をめざす民族的な理想につながる、みごとに在り方を示しております。宮大工の話では済まない程、奥行きのある事です。御宝物を作りあげる技術が、極めて高水準にある事は、やはり理解していただきたいものです。

伝統回復

ところがその技術が、例えば途絶えたらどうなるのか。あるいは今まで拝んでいた建物が、地上から無くなってしまった事態も、歴史上には有りました。その一番激しい時

代が、千四百六十年代、室町後期のことです。

日本の歴史の中で何処に一番、歴史の裂け目が有るのでしょうか。皆様がまず考えられるのは明治維新、あるいは今次大戦終結の昭和二十年八月十五日、英霊にゆかり深い日、この辺りと思われるでしょう。では式年遷宮をめぐる、もつとも苛烈な歴史事情を申しませう。

中世も終りに近い室町後期に、式年遷宮は寛正三年（一四六二）から天正十三年（一五八五）までの百二十四年間、後土御門・後柏原・後奈良・正親町天皇の四代にわたってブランクになったのです。戦国大名が抗争をかさねて、足利幕府は無力化して都大路も荒廃をきわめ、諸国にひろがる戦乱が飢餓と貧困をもたらしました。そうした戦乱の巷にあって、百年以上も遷宮をすることができなかつたのです。

では明治維新はどうでしょうか。明治二年に第五十五回式年遷宮が行われております。

ところが、これは徳川の幕政下で全部準備し、特にその最後の山田奉行は、神戸かたべの本多藩ですから、本多のお殿様はものすごい尽力をされました。したがって明治維新の時は、何の遅れもなく遷宮ができたのです。明治維新は近代日本の幕開けをつげる激動の変革期でありましたが、伊勢の遷宮においては、いささかの遅滞も来たさなかつたのです。幕末の世相を背景として諸物価が高騰し、神戸藩の財政を傾けるほど困難を強いましたが、遷宮自体はきわめて順調に行われました。

そして今次大戦終結の事情をみますと、当初は昭和二十四年が式年遷宮の年でしたが、陛下が祖国再建の目途がたつまで、暫く伊勢の遷宮を延期せざるを得ないものと判断され、延引を御沙汰になりました。しかし全国の崇敬者の本当に熱いお気持ちをもって、遷宮を早期執行する事こそ、戦後復興をめざす国民的合意を伊勢に結集することであると、僅か四年後の昭和二十八年、講和独立の喜びをこめて、御儀が斎行されたのであります。

室町後期は百二十余年、明治維新はゼロ、今次大戦は四年、遷宮をめぐるこのプランクの度合いを見ていただければ、中世末葉に日本歴史として深々とした裂け目が入っている事を、よりよくご理解いただけると思います。

もうひとつ、例えをとりますと、カルチャーとか文化とか教養講座などが、昨今非常に流行っております。文化教養を高めると婦人方がなさっておられるお茶、お花、あるいは書院造りの床の間にしても、全部お考えいただいたらお分かりになる様に、室町文化なのです。それ以上には遡りません。と言う事は、やはり日本歴史の裂け目と非常に深い関わり合いを持っているのですが、このあたりは文化論の問題です。

式年遷宮においては、室町後期の千四百六十年から千五百八十年あたりが、きわめて深刻な世相であり、これだけのスケールと歴史を持つ事業の難しさをしのばせて余りあ

ります。天正十三年に再興なつたといわれますが、完全に元の姿で再興されたと思われ
ますか。百二十年余とは、この世に遷宮執行のすがたを誰一人として見た者がないほど、
長く途絶えていたことを意味し、したがって天正十三年の再興を迎えれば、それですべ
てが「はい、おめでとう」という訳にはいかないのです。何故ならば、祭儀・殿舎・神
宝など、伝統面を一つひとつ再興しなければ、遷宮の実質が満たされたことにはならな
いからです。

では何時、おおよそ元通りの姿になつたのでしょうか。昭和四年です。その間、四百
数十年を越えています。百二十年というブランクがあると、それを取り戻すのに四百数
十年かかるのです。この血と汗と涙を、我々は軽く考えてはなりません。伝統技術は一
端途絶えると、元に戻すのに二倍あるいは三倍の努力を要します。だから式年遷宮を途
絶えさせてはならない。平成の御代においては固よりのこと、子々孫々に至るまで、民

族の文化の核にあるものとして、これを途絶えさせてはならない。そういう祈りが、本
当に胸奥から込み上げてくるのは、そのような歴史があるからです。

一口に千三百年の遷宮史と言いますが、千三百年の内には、四百数十年におよぶ再興
への努力が含まれての千三百年であり、その意味するところを充分に汲み取っていただ
きたい。伊勢の遷宮を行なうことは、今日生きている者の使命であり、次の子孫への贈
り物として続け、決して絶やしてはなりません。それを、この歴史の教訓が如実に物語
って余りあることを、ひとしく熟考していただきたいものです。

清らかな神

次に第三点、国民的立場からみた遷宮という事です。

日本人にとって神さまと問われた時に、何をもって表徴化しているか、改めて考えください。伊勢の土産物屋に行きますと、生姜糖しょうがとうが売られています。あの生姜糖の形、あるいは神宮でお剣先と呼ばれるお札さんの形。また、熨斗袋のしづぶろの右肩に印刷してある熨斗の形、ひとしく剣菱の形をしています。日本人は神さまといわれた時、これを連想してきました。

熨斗袋は相手に真心を伝える物、進物としてプレゼントする時に使います。これは神の標識であると同時にプレゼントの標識、真心をしめす表現らしい。では本来、袋に入っている物は何だと思われませんか。熨斗鮑のしおぼと言ってもいいのですが、今は神さまのことを主としますから、考えますとこれは祓串はらいぐしです。祓の幣ぬまですから、先程ご本殿で、神職さんから清めのお祓いをしていただきました。あの修祓しゆはらする道具そのもの、それを片木へぎ、小さな薄い木にして折り込んだのがこれです。祓えの幣ではなくて、我々の生活にもた

らされる海の幸の代表とすれば鮑あわびとなります。黒潮の流れに沿った伊勢湾岸に住み、はるか常世とこよの浪音を耳にしながら、恵み豊かな生活を営んできましたが、朝な夕なに感謝を捧げるべき神々の姿、それを鮑あわびという海産物に変えても大差はありません。我々は神というものを何で考えたか、それはお祓いという心と形をもって神をイメージさせ、大切なものと考えてきたということでしょう。

以前、イタリアのローマのバチカンへ行きましたら、尼僧がロザリオという十字架を、腰につけていました。これなどはゴルゴダの丘上で、イエス・キリストが磔はりつけになった姿そのままを、贖あがないの神と崇めるものでしょう。別に戸塚原刑場の晒首あびくびというつもりは無いのですが、文化の質において、神道や神社は極めて平和的です。そういう血に染められた神々の忌まわしい思い出はありません。

お祓いの道具そのものを神と仰いでいるところに、神道あるいは日本文化にとって、

清らかさが一番核心にあるもの、とお分かりいただけると思います。では、その価値のある清らかさを、どうしたら維持できるか。それが次に問題となるところです。

たとえば「御祓箱」という言葉があります。世間一般では役立たず、用無し、窓際族を表現する時に使います。ところが、あの御祓箱とは、本来そういう意味ではありません。皆様方が、それぞれご家庭の神棚でお祀りになっておられる神札は、紙製の剣祓や部厚い角祓、あるいは箱形の神楽大麻であろうと思います。角祓は箱形式の御札をペシヤンとひしゃげたものですから、本来は箱なのです。また内宮の神楽殿に行かれて神楽をおあげになると、箱に入った神楽大麻というのを授与されますが、それこそ御祓箱そのものを踏襲した形態のものです。では、それが役立たずになるとは、どういう事か。御札には期限があるのです。いつまで有効とは書いてありませんけれども、日本人ならば頭の中で常識として有効期限が何時であるか、固より承知してきました。

これから年末にかけて、神社の神職さんや総代さんが、伊勢神宮と氏神さまの神札を各戸に配っていかれます。ともすれば押し売りと間違えられ、「間に合ってます」「それは以前貰ったことがある」と冷たい言葉で断られると聞き及びますが、あの考え方は間違っているのです。日本人は神札や御祓いというものを、一定期間が過ぎたら効力がなくなる事を理解していました。その前提のもとに期限を過ぎれば、用無しの御祓箱となるのです。効力はおよそ一年が相場でしょう。一年経つと、今までのものは返納して、また新しい清らかな神威を蒙り、新たな生命をとりもどす気持ちで、新しいお札を受け取ります。だから「間に合っています」とは、昔の日本人は少なくとも考えなかったのではないのでしょうか。

私達人間は、神や聖人ではないのですから、ややもすれば心ならずも知らないうちに間違いを犯しかねない。したがって定期的に、神と共に清らかに、もう一度原点に戻り

ましようという考え方です。その考え方に立つなら、御祓箱はどうしても出てこなければならぬものなのです。古代人はもつと早かった。春秋の二分や夏の二分など、半年回りですから、年二回取り替えたことになります。けれど今は一年方式にもとづき、それを称して「神宮大麻」と呼んで、全国の家庭に九百二十余万體ほど頒布されております。

天地の浄化

伊勢神宮と国民の皆様方との結びつきは、「伊勢に行きたや、伊勢路が見たや、せめて一生に一度でも」と歌われた伊勢参宮を別にすれば、神札がより日常的なものです。皆様方にとって身近な天照大御神とは、ご家庭の神棚に祀られている神宮大麻なのです。

神札が長持ちしないという前提に立つなら、本体である伊勢の神宮も、当然ながら一定年限ですべて一新されなければなりません。神様の住んでおられる建物や、神殿を埋める沢山な宝物が、二十年で耐用年限がくるという事は、我々の清潔な浄化の感性でとらえ、神宮全体をクリーニングするほどの気持ちで、遷宮理由そのものを納得していただかなければ、日本人ではないと思うのです。

我々は畳ひとつ取り替えても、あれほど清々しい気持ちになれるのです。だったら御殿と宝物、あるいはお宮が建っている場所そのものが替わったら、天地の一大浄化につながり、もつと大きな清らかさが回復されるにちがいないと、感覚として分かります。それは神札と同じ道理なのです。

今から申し上げることは、あくまでも私の推測です。しかし、そうでなければ理屈が合わない事を、ひとつつ申述べます。伊勢のお宮にご参拝になりますと、東西同じひろ

さの「御敷地」という場所が望めます。御殿は現在、西側に建っており、今回は東側へ移りますので、いま東の御敷地で新殿造営の工事が、着々と進められています。二十年毎に、お宮は西から東へ、東から西へと行ったり来たりするのです。現在の敷地・建物に関して、東側がもっている意味は何か。それは古い御殿をその仮にして、新しい御殿を造らなければならない。しかも神様は、新宮が見事に竣功なって旧宮からお移りになるため、同じ場所がいるのだ。それだけの意味でしょうか、というのが今からの問いかけです。

来年の夏、お白石持ち行事が行われると申しました。御殿の瑞垣の中にある純白の世界の中を、徳川時代の文献によりますと、「お白州」と呼んでおりました。我々はお白州というと、町奉行所の裁きの庭をすぐに思い出します。遠山の金さんなら片肌を脱ぎだす所です。あのお白州という感覚は、罪が無くなって真人間に立ち返る、という無垢

の世界のことを呼んだのでしょうか。ならば、この白石が敷かれる瑞垣内の純白の世界は神の世界であって、もとより罪も穢れも無い所を、お白州そのものと呼んで当然だと思います。

ただ、お白州を再現するために、石の一つ一つまで取り替えなければ気が済まないという日本人の感性は、やはり納得していただきたい。これを見落としたら遷宮というのが分からなくなってしまうからです。式年遷宮の気持ちを精神的に汲みとるには、わが民族が久しく培ってきた清潔なる感覚をめざして、全身の神経を研ぎ澄まさなければならぬのです。

お白石はデコレーションケーキでいえば、一番上のクリームのようなものです。ベースになるファンデーションの部分、砂や土です。土までは入れ替えませんが、砂を取り替え、石を取り替えるのです。全部を取り替えるという気持ち、遷宮それ自体の精神

に潜んでいるのだという事を、やはりご理解いただきたいのです。

私はこの事を説明する時、よくこれを「トマトの連作栽培がいけないのと同じ」と言っています。何故なら、大地は母なるもの、母に繋がる大地を取り替えなければ話にならない。建物・宝物以前の時代はどうだったかといえば、神祭りの新たな適地を探しもとめるように、土地そのものを取り替えていたのではないか。それが遷宮だったのではないでしょうか。もし、宝物とか建物とか物にこだわりの無い自由な頭で考えるのなら、土地を取り替えなければ遷宮にならない。これが米作り民族、日本人としての基本にある感覚なのだ、という事をやはり押さなければなりません。だから、敷地が東西に替わるのは、単なる造営上の必要からでは無く、母なる大地のもつ生命力の更新につながる、清浄さの極致をめざす理念が息づいているためと思っています。

以上申し上げた事は、遷宮とはさながら、天地浄化の営みであり祈りである。天地が

浄化されれば、そこにおのずから、神の命もまた新たに蘇るといふ信念を、我々日本民族は持ち伝えているのだ。そして、その典型的なお祭りが式年遷宮であり、今日まで永々と続いてきたのが、歴史の真実であろうと思っております。

天皇主体の厳儀

もうひとつ、最後の止めで申し上げます。この式年遷宮は、私ども国民だけのお祭りではなくて、陛下のお祭りだという根本の道理を見失ってはならないと思えます。

陛下のお祭りをご担当になるトップの方が、掌典長という職名の方です。全国には、勅祭社と呼ばれる有名なお社があり、そこに差遣せしめられる方がたは、掌典を限りといたします。ところが唯一の例外として、掌典長が外部にお出ましになるのは、伊勢の

式年遷宮のみだという点、遷宮のもつ根本義を窺うことができるのです。

その掌典長が、天照大御神の御霊代である神鏡「八咫鏡」を、新しい建物へお遷しする出御の際、「神様どうぞお出ましになられるように」という出御の三声を唱えることで、神秘莊重をきわめる遷御の儀が始まるのです。天皇様の御名代である掌典長自らの

「出御」の声をもって、伊勢の神遷しが始められることを、確認しておかなければなりません。

式年遷宮は、国民皆様のお力添えをいただき、神宮も組織を挙げて準備します。けれど、遷宮そのものを行わせられる御方は、天皇様なのだということを核心として押さえないと、焦点がぼやける感じがいたします。

そしてその事をよりよく確認するために、神話世界に話しを戻します。天の岩戸の話はご承知の通りです。あれは、今日の家庭内暴力の様なもので、どうしようもない子

供が居り、それがスサノオノ命です。乱暴を働いて、田は壊し、機織りの御殿に穴をあけて馬を投げこむなど、様々な悪事を働きます。勘忍袋の緒を切ったわけではなく、むしろ深い反省の神意ながらに天照御大神は、天の岩戸にさし籠られてしまわれました。そうすると高天原という神々の世界が「常夜行く」状態、つまりは暗黒の世界で、様々なマガマガしい事、悪い事が次から次へと起こってくる。再び天照御大神に御出現いただかなくては、神々の世界が一日たりとも立ちゆかない状態になって、天の岩戸の神祭り神遊びが行われたのです。

この神話の意味を端的に申すなら、神々の世界においては天照大御神がたとえ一日たりとも居られなければ、世界全体が立ちゆかないことを物語っております。ならば私達この日本人が国家と社会においても、天の岩戸の神話が伝えるマガマガしい状態になる事を避ける上から、天照大御神の至高・絶大なる御存在をぬきにしては考えがたい。そ

れが『古事記』『日本書記』という民族の古典に仰ぐべき、建国以来の久しい祈念であることを確認しておきたいものです。そして大御神は国家・国民とともに永遠に坐しますが、とりわけ二十年毎に天の岩戸の再演として、廣大無辺なる大御光を仰ぎまつる。それが遷宮の祭りにほかならない事を、深い意味として重ね合わせてご理解ください。まことに幸甚に存じます。

ご静聴のほど、ありがとうございました。(拍手)

奉賛会講演集 第六輯

平成五年四月一日発行

発行者 三重県護国神社奉賛会

〒514 津市広明町三八七番地
三重県護国神社内